

「世界に対する神の愛」

～あなたに永遠の命が届けられるために～

ヨハネによる福音書 3 章 16～21 節 讃美歌 265、506

16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。18 御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。19 光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。20 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。21 しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

申命記 30 章 15～20 節

15 見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。16 わたしが今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入って行って得る土地で、あなたを祝福される。17 もしあなたが心変わりして聞き従わず、惑わされて他の神々にひれ伏し仕えるならば、18 わたしは今日、あなたたちに宣言する。あなたたちは必ず滅びる。ヨルダン川を渡り、行って行って得る土地で、長く生きることはない。19 わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、20 あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。それが、まさしくあなたの命であり、あなたは長く生きて、主があなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた土地に住むことができる。

■ 本論

いつの頃からか、「パワーワード」という言葉を折に触れて目にするようになりました。意味としては文字通り「力ある言葉」。短く、簡潔で、それでいながら、強烈なインパクトを残す、キャッチーな言葉のことを言うそうです。

その意味では、ヨハネによる福音書は、「パワーワード」の連続なんですけれども、とりわけ今日、お読みした 3 章 16 節は「パワーワード」の中の「パワーワード」と言うことができるでしょうか。神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

この言葉を、宗教改革者のマルティン・ルターは、福音が凝縮されたもの、「福音のミニチュア」と語ったそうです。神は世を愛された。これこそ、神からの良き知らせ、福音であると。

もうこの一語を覚えておけば、天国へと行けるといような、この御言葉を握りしめていれば困難なこの世も生き抜いていけるといような味わい深さを持っています。

が、それでいて、この御言葉を、この福音書の文脈の中で読むということは、この御言葉の有名さから比べれば、案外少ないのではないかと自分自身のことを振り返ってみて思います。そういえば、これは、ニコデモとの対話の中で語られた御言葉であったと、今更ながらのように気づかされたりするんです。

そういう気付きが与えられることは、このような連続講解説教の良さです。

このイエス様の御言葉は、「イスラエルの教師」と言われる、ファリサイ派、最高法院の議員ニコデモとの対話の中で語られたものです。

既に、わたしたちは二回の礼拝をかけて、その対話を読み進めてきました。

最初は 3 節、イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」

この御言葉を始まりとしながら、ニコデモはその意味を理解できない、が、食い下がるゆえに、イエス様の言葉は重ねられていったのでした。

5 節、「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。」

人を新たにするのは、「水と霊」である、すなわち、聖霊の御力である。

が、ニコデモは依然として分からない。それでも、帰らない。

そこで、14 節、そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならないと言葉が重ねられました。この人の子が上げられること、すなわち、十字架に上げられることにおいて、人は新たにされる。

15 節、それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

それでも、ニコデモは分からない。が、なおも食い下がる。

そこで、16 節の御言葉が生まれるのでした。

神は、その独り子をお与えになったほどに世を愛された。

こうして、読み進めていきますと、気づかされることがあります。

イエス様は、ずっと同じ一つのことを言われているんです。

人は、どのようにして新しくされるのか、救われるのか。

それは、神がなさることだと。

そのことを、聖霊の御力による、人の子による十字架によると、語って来られた。

であれば、もう一つ最後のピースが必要です。

聖霊が語られ、人の子の十字架が語られ、であれば、父なる神様のことです。

ここには、三位一体の神の構造がある。三位一体の神が語られている。

イエス様がニコデモに伝えようとしたことは、人は神によって新しくされるんだけど、その神とは、聖霊と御子と、そして御父から成る三位一体の神であるということです。人は、三位一体の神によってのみ救われうるのだと。それが、イエス様の言おうとされたことです。

私たちの信じる神様はお一人なんですけれども、そのお働きは三様にある。

その三位一体の神のお働きを、このヨハネによる福音書は特に注意して描き出す福音書です。

十字架に掲げられて救いを成し遂げる御子の働きがある。

その救いを、私たちに、信じる人間に結びつける聖霊の働きがある。

そして、それらのお働きをひっくるめて、一つにまとめて、導いておられる父なる神のお働きがある。

今日、お読みしたのは、その父なる神様のお働きに特に注目して語られたところでした。神は、その独り子をお与えになったほどに世を愛された。

イエス様が、父なる神様のお働きとは何かという時に、たった一言で言い表すならば、それは「世を愛された」ということでした。

ここは、ギリシア語の語順ですと、「愛された (ἀγαπάω)」という言葉が最初に来ます。「愛された・神は・この世を」と。

神のお働きはこれだと。愛されたと。これに尽きるとイエス様は言われる。

その愛は「アガペー」の愛です。無償の、一方的な、一点の曇りもない愛です。

この世を全面的に肯定する愛です。

しかも、その愛が「愛された」と過去形で記されています。その過去形は過ぎ去ったことを意味しているわけではありません。事実の重みを表わしているんです。絶対に消えることがない確かさを表わしているんです。

神の愛は、変化もしなければ消えもしない。この世界を極めて良いものとして造られた、その時から変わらない同じ御心を、愛の御心を、この世界に注いでおられる。

それは、「その独り子をお与えになったほどに」だと言われる。

父なる神のお働きは世を愛することなんだけれども、その愛は、独り子を与えるということであらわされるものなんですね。

「愛のしるし」として、神は、独り子を、この世に与えられました。

私たちが生きる、この世に与えられました。

この世は、どういう世か。私たちが生きる世界はどのような世界か。

ヨハネによる福音書が「世」という言葉を使うとき、それはただ一般にこの世界をあらわすのでは

なくて、神を認めない世界のことを言います（1章10節「世は言を認めなかった」）。

罪と悲惨の中であって、イスラエルの民が荒野で炎の蛇に噛まれたように、神の刑罰を受けなければいけない世界のことを言います。

それは、神が怒りをもって消し去っても文句の言いようがない世界のことです。

それが、わたしたちが生きている世界です。

その世を、神は愛されたと言われる。愛されたがゆえに、救おうとされた。

17節。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

「裁く (*krivō*)」という言葉は、もともと「区別する」、「分ける」という意味を持っています。善と悪を分ける・区別する。

それは、神のみが正当になせることです。何が正しくて、何が悪いのかを見分ける。

エデンの園で、人間はこの力を手に入れたかった。

善悪の知識の木の実を食べることで。

本来、神だけがもつ善悪を見分けることができる力を人間は手に入れようとして、神との約束を破って、木の実を食べた。しかし、神との約束を破るという点において歪みを心の中に引き込んでしまった人間は、善と悪とを見分けるんですけれども外的外れだという悲惨の中に身を置くことになりました。今も身を置き続けています。

本来、神だけが正当に善悪を見分けることができるお方、裁くことができるお方です。

しかし、神は「世を裁くためではなく」と言われています。つまり、独り子をこの世界に与えるのは、この世界を善と悪とに分けるためではないのだと言われる。神御自身だけが持たれる、その御力を、その特権を使わないと言われる。

神の御力が振るわれるのは、この世界を善と悪とに分けるためではなくて、「世が救われるため」です。それが、神の愛なんです。

愛は正義と悪とを分けるものではない。むしろ、悪を覆って、救う。

それが、父なる神様のお働きです。

18節。御子を信じる者は裁かれぬ。区別されない。

御子を信じる者を、神は区別されない。

この人の信仰は生ぬるい。この人の信仰は立派。そんな区別をされないんです。

長い信仰生活を送った。僅かな信仰生活。そんな区別をされないんです。

御子を信じるという一点において、神はこの世を、この世に生きる人間を救われます。救うというのは、救い上げる。ご自身のもとに引き寄せるということです。

もう一度、16節に戻ります。

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

神の愛は、人間を救うんです。お前はダメだと引き離すのではなくて救うんです。

それが、「永遠の命を得るためである」と言われています。

「永遠」というのはなかなか私たちの肌感覚で捉えがたい概念です。

辞書を開きましても、「始めもなく終わりもなく果てしなくながく続くこと」などと書いてありまして、何のことやらとなってしまいます。

ただ、このヨハネによる福音書が「永遠」という言葉を使う時の意味は明確です。

他の福音書を見ますと、「永遠に罪の責めを負う」（マルコ3章29節）ですとか、「永遠の火に投げ込まれる」（マタイ18章8節）ですとか、非常に恐ろしい、長く果てしない「永遠」という言葉の使われ方がなされているんですけれども、この福音書にはそういう使い方は見られません。ヨハネは一つの使い方しかしません。

「永遠の命」、「永遠に生きる」。それだけです。ヨハネにとりまして、「永遠」とは命なんです。その命の源たる神と共にあることなんです。

罪は人を神から引き離します。罪は人に死をもたらします。

その死に勝利される永遠の神と共にあること。

そのような救われた状態を、ヨハネは「永遠」と呼びます。

「永遠の命」とは、永遠なる神と共にあることです。

ですから、「永遠の命を得る」ということは、死んで天国に行ってから、ということではなくて、今、この世界の中で、独り子を信じるときに、もう既に始まっているものです。現在からも神と共にある命、すなわち、永遠の命に生き始めるんです。

「独り子を信じる者が」です。

「独り子を信じる」というのは、「独り子の中へ信頼を置く」という表現です。

ふつう、人間は自分の中へ信頼を置いています。

的外れな判断をする自分の中へ。それ、善悪の知識の木の実を、神との約束を破るかたちで食べてしまった人間の悲惨なんです。

何が正しくて、何が間違っているかも分からないのに、でも、自分を信じようとするんです。自分の正しさに頼ろうとするんです。

その過ちに気づいて、独り子の中に信頼を移す。

過ちを認める。それを「悔い改め」と言います。

その過ちを担ってくださった十字架の独り子の中へ信頼を置く。

その者が区別されることなく「一人も滅びない」ことを神は願われました。「滅びる (ἀπόλλυμι)」という言葉は、「失われる」という意味の単語が使われています。一人も失われなくて、神と共にあり続ける。永遠の命に生き続けること。

ここに、神の愛があります。このことを、神は求めておられるのです。

神を見失った世界の中で、あなただけでもこっちに来いと。

独り子の中に信頼を置いて、後のことも全部ゆだねて、こっちに来いと。

一人ひとりに呼びかけておられる。

「信じない者は既に裁かれている」からです。既に裁かれている。

神が裁くまでもない。神が区別するまでもない。むしろ、私が神を裁いている。

ここに神御自身がおられ、ここに神の御言葉があり、ここに神の御光があっても、人は、闇の方を好むものです。

神の教えに諭されるよりは、その束縛を断ち切りたいと思うものです。

聖書の御言葉よりも、もっと役に立つ知恵はないかと捜したくなるものです。

あるいは、聖書を読むんだけど、これは役に立つ言葉、これは役に立たない言葉と、選り好みをしていたりする。

神は区別しません。人間が区別しているんです。曇った目で。

曇った心で言うんです。“すべての人を救わない神は心が狭い”。

“罪なき人を理不尽な不幸に貶める神は神ではない”。

自分の願望を叶えてくれる神だけを、神とする。

自分で選んでいるんです。

悲惨の世界の中にそのまま身を置くことを。それがもう裁きになっている。

自分で、自分を裁いているのです。闇の方に身を留まらせていることで。

そんなことを、神は願っておられない。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛されたんです。

独り子を信じる者が一人も滅びなくて、永遠の命を得ることを願われたんです。

新しく生きることを願われたんです。

この言葉は、ニコデモに語られたものですがけれども、決して他人事ではない。

世を愛された。その世の中に私たちも生きています。

自分の中に信頼を置いて、自分で悪を選択して、自分で自分を裁いています。

自分を神様から遠ざけています。こんな悲惨はないのです。

「独り子を信じる者が一人も滅びないで」と言われる、その「一人」というところに、自分の名前を書いても良い。その「一人」は、あなたのことです。

あなたが、神から失われない、神から立ち去って行かない。

そのために、父なる神は、独り子の命をかけたのです。

私たちが信じるべきは、その神の愛です。あなたを神に繋ぎ留める愛です。

21節、「真理を行う者は光の方に来る」と言われています。

こういうことを書いてある文章に出会いました。「善き行いは、悪しき行いの告白から始まる。あなたは真理を行い、光の方にやって来る。真理を行う、とはどういうことだろうか。自らをおだてたり、なだめたり、自らに媚びへつらったりしないこと、悪しき者であるのに、「自分は義しい」などと言わないことである。そのとき、あなたは真理を行い始めるのだ」(アウグスティヌス『ヨハネによる福音書』第12説教)。

神の愛を見つめるために、自分の罪を見つめることは大切です。

自分の狡さや、いい加減さや、おおよそ神のみ前に立つのが恥ずかしい。

人間として恥ずかしい。そう気づくために、自分の罪を見つめることは大切です。

そのこと自体が、真理を行い始めることです。

それは、神の赦しを求め始めていますので。神を必要とし始めていますので。

そして、そのとき、気づかざるを得ません。

その行いが神に導かれてなされたということに。

先ほどの文章は引き続き、こう記していました。「あなたが不快に思うあなたの罪は、神があなたを照らすことなしには、あなたがそれを不快に思うことなどない」。

本当に、そうなんです。神の導きなしに、人間は一ミリも自分の罪を本当の意味では認めません。その罪を憎むことができない。自分を滅びの中に括り付けているにも関わらず、その罪に親しささえ覚えたりする。

あるいは、自分の中に善悪の規準がある限り、何らかの言い訳を残します。

こういう自分が嫌いなんだと、神に助けを求めるとき、そこには神の導きがある。

そして、その導きに、心ゆだねる者は、神の愛を知るのです。

御子を信じる者は裁かれません。

十字架に凝縮される御子の言葉に、その行いに信頼を置く者を、それが自分にはどうしても必要だという者は、分け隔てなさいません。救われます。

それが、父なる神というお方なんです。

それが、イエス様が教えてくださった神というお方なんです。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

この御子の言葉を信じる者を、神はふところに抱かれる。

救われる。それが、神の愛です。

お祈りをいたしましょう。

■ 祈り

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。

ヨハネの手紙一 4章 10節

■ 静止の時

子どもと親のカテキズム

問48 恵(めぐみ)を与(あた)える方法(ほうほう)とは何(なん)ですか。

答 御言葉(みことば)と礼典(れいてん)と祈(いの)りです。イエスさまは、とくにこの三つの方法(ほうほう)を用(もち)いて、聖霊(せいれい)において私(わたし)たちと共(とも)にいてくださり、救(すく)いの祝福(しゅくふく)を豊(ゆた)かにあたえてくださいます。

前回の問 47 で、「復活のイエス様はどのようにして礼拝において共にいてくださるのですか」と聞き、「復活し、天におられるイエスさまは、特にご自分の恵みを与える方法を用いて、聖霊において共にいてくださいます」と教えていました。

その「方法」が、「御言葉と礼典と祈りです」。

逆に言いますと、この「方法」の中に身を置くときに、私たちは神様の恵みを受けることができると言えますし、また、この「方法」をなしているところこそが教会であるということが出来ます。

教会とはいかなるところか。それはいろいろな言い方ができるにせよ、一つ「御言葉と礼典と祈り」において、神の恵みをいただくところだと言うことができるでしょう。

その意味で、教会の外に救いはなしと言葉は正当に語られてしかるべきものです。

「御言葉と礼典と祈り」があるところに神は共にいてくださり、恵みを注いでくださいます。